

文廷式の来日と孫文

遊佐 徹

I

文廷式（咸豊六年～光緒三十年〔1856～1904年〕。字は道希等多数、号もまた多数にのぼるが、芸閣、純常子をもって知られる。江西萍郷の人）の名は、長らく「日清戦争での敗北を契機とした清末変法論の高まりのなかで康有為が光緒二十一年（1895年）北京に設立した政治団体、強学会の主要メンバー¹」以外にさほど私の興味を引く対象ではなかった。もっとも、中国近代政治思想史研究者の立場からすれば、彼がとりあえずこの程度の知識でも事足りる存在であることも事実である。というのも、その強学会が、設立の年の冬、すなわち光緒二十一年十二月六日（1896年1月20日）の上諭をもって封禁され、彼自身もその翌年の春には弾劾を蒙り（光緒二十二年二月十七日〔1897年3月19日〕）、革職のうえ原籍地へ追放の処分を受けることになる、すなわち、戊戌維新へと向う変法論の展開と政変による頓挫という一連の政治ドラマに加わる資格を剥奪されてしまうからである。

ところが、近年、その文廷式が全く予期しない形で私の目の前に現われることとなったのであった。

その経緯については、「研究ノート 文廷式の来日について」（『中国文史論叢』第12号、2016年、以下「研究ノート」と略称）で詳しく述べて置いたが、いまそれを簡潔に記すならば、学内外の研究助成を得て2014年から継続してきた研究プロジェクト²——近代において岡山を中心に構築され、政治外交史、産業技術交流、文学・芸術交流史の各方面において機能した東アジアネットワークの解明の過程において、ネットワークの結節点のひとつとして設定した岡山、児島の塩業家、野崎家について調査を進めていた際、1900年の春、東京、麹町にあった三代目当主、野崎武吉郎の邸宅を文廷式が訪問していたこと知ったのである。当初、その事実は、文の日本滞在記である『東遊日記』³によって確認されたのであるが、やがて、その来日には、民間のアジア主義団体である東亜同文会が関わっていたこと（野崎武吉郎は第1回帝国議会から貴族院議員を歴任する——東京の邸宅はそれに応じたものであった——なかで近衛篤磨と関係を深めてゆくことになるが、その近衛は、1898年に誕生した東亜同文会の初代会長であった）、『東遊日記』にしばしば登場する日本人、白岩（日記中では「白巖」と表記されることもある）が野崎武吉郎の支援を受け、のちには「アジア主義実業家」と称されることになる白岩龍平⁴であること（白岩は岡山の関谷学校とも縁が深い）などが判明してきたのである。

II

こうした発見を改めて関連資料に照らし合わせることによって、文廷式の来日の意味、実際に明らかにするための糸口を見つけ出す作業が「研究ノート」の作成であったのであるが、その作業は、いくつかの新たな興味深い事実の発掘とそれが生み出す課題、疑問点の把握に繋がった。それらについては、「研究ノート」の増補版である「文廷式の来日と東亜同文会——研究ノートと資料」（『学術、文化、芸術、教育活動に関する研究論叢 30』——平成27年度両備櫻園記念財団研究助成金による研究報告に掲載予定〔2017年9月刊行予定〕）に列挙したが、いまそれらを一部加筆のうえ再録してみたい。

- 1、文廷式の来日に対しては、『東遊日記』に拠って、それを康有為等維新派の亡命とは異なる全く政治と距離を置いた旅であったとの評価がある⁵一方、彼は政治に関する発言を極力避けるよう努めていたのだという指摘もある⁶。このふたつの相異なる立場に対しては、後者の方に軍配を上げなければならないであろう。そう判断できる根拠は、彼が日本滞在中にとっていた行動のなかに見出すことができる。それはかの中山樵との会見である。中山樵が日本亡命中の孫文の化名であることは改めていうまでもない。文廷式は、3月5日に彼以上に清朝から危険視されていた孫文と東京で会っていたのである。この事実は、『東遊日記』には見えず、以下のような白岩龍平の日記——いまそれは『白岩龍平日記——アジア主義実業家の生涯』⁷という名で公刊されている——によって明らかになったものである。

3月5日 天気与心晴朗、訪澁沢不会。携艶子到五番町、野崎氏与碧堂一同午飯。訪手嶋。午下訪大倉、到大東会社、此日係株式会社創業総会。散後在木挽町小宴、散後再到住吉使文与中山晤。

それでは、何故ふたりは会ったのだろうか。会ってどのような話をしたのだろうか。これらの疑問の解明は、文廷式の来日の意味を考えるうえで重要な鍵になるかもしれない。

- 2、『東遊日記』には、板垣退助、大隈重信、伊藤博文、犬養毅といった当時の日本を代表する重量級の政治家やアジア主義の巨頭、頭山滿との対面があったことが記録されている。文廷式があえて政治を語らなかったとしても、当然、文は彼等が面会に来た意味を忖度しただろうし、また、彼等には文に面会する理由があったはずである。それらの解明が今後文の来日研究を進めるうえで大きな課題のひとつとなるだろうが、その準備として、当時の日本の政治状況、日本の清朝・中国に対する関心の実態を精密に押さえる必要があるだろう。

3、『東遊日記』および『白岩龍平日記』からは、文廷式の滞在中、清国駐日公使李盛鐸が常に行動をとともにしていた様子が窺われるが、西太后によって逐われ、戊戌維新への関与の嫌疑から上諭をもって官憲の追及対象ともなっていた（〔光緒二十四年八月〕初十日、上諭密電、電寄劉坤一等、已革翰林侍讀學士文廷式、是否在籍、抑在上海一帶、著劉坤一、翁曾桂密飭訪拿、押解來京⁸⁾）文の來日と行動に清朝当局がどの程度の知識、関心を持っていたのだろうか。なお、文と李盛鐸は、そもそも同郷（江西）で、日清戦争においてはともに主戦派に属し、戦後は強学会を組織するなど政治的立場も同じくする間柄であった。そうした親密な関係が、文に対する朝廷の追及を上回ったとも考えられるが、文の滞在中における清国公使館の関わり方を考慮するとその來日、滞在を李が秘匿し切れたとは考えにくい。あるいは日本側の保護、配慮が強く働いていたのかもしれない。だとすれば、上記の2が別の意味において理解されることにもなり得るだろう。

4、『近衛篤磨日記』⁹⁾を読むと、文廷式の滞在中に香港とシンガポールより康有為より書状が近衛の元に届いた（その文面は、『近衛篤磨日記』によって知ることができる）ことが確認できるが、これは偶然の出来事なのであろうか、それとも文の來日と関連付けて考えることが可能なのであろうか。後者であるとすれば、東亜同文会と康有為、梁啓超との微妙な関係¹⁰⁾を含め、当時の清朝の動向に絡む東アジア政治ネットワークの存在を強く想像させる一事だといえる。

5、政治を語ることを避けていた文廷式は、一方で文化的交流には積極的であった。これは現在においても文廷式の來日の研究における中心テーマのひとつであり続けている¹¹⁾が、文廷式の來日、滞在を記録した複数の日記資料によって、文化交流の実際が交流内容、交流人物等の面でより正確かつ具体的に判るようになった。こうした作業のさらなる拡充によって、日中漢文学交流史や中国近代文学史の補足、修正が可能になるかもしれない。

III

以上に提示した課題、疑問点のうち、本稿では主に1について検討してみることにしたい。

すでに指摘して置いたように、文廷式が孫文と会っていた事実は、白岩龍平の日記によって確認できたものである。そこで、改めて白岩の日記に目を通すと、3月5日以前にも孫文が白岩のもとを訪れていた記録があることに気が付く。

2月24日 訪松永、神鞭、林有造。夕永井向上海送到新橋。宮崎与中山樵來訪不值。

2月24日は、文が神戸より陸路東京（新橋）に到着してから僅か1週間後のことになる。日記には「^あ値えず」とあるので、残念ながらこの日、中山樵＝孫文は白岩に面会することができなかったの

であるが、この訪問が、実は文廷式との会見（もしくはその準備）を意図してのものであったことはそれほど論証が難しい推定ではない。

そのためには一方の当事者である文の『東遊日記』の3月5日の条を見て置く必要がある。

二月五日（3月5日） 晴。板垣退助日本従二位伯爵、片岡健吉等約談、皆自由党人也、必欲余談政事、余無所言、略問其党中意旨而已。訪森大来、重野成斎、並不遇。晚宮崎招飲。

文廷式のこの日の日記は、白岩のそれとは異なり、孫文との会見について全く触れることなくその記述を終えているのであるが、これと2月24日の白岩の日記を突き合わせると、ある共通点を見出すことができるはずである。それは「宮崎」という日本人の人名の存在である。この「宮崎」とは、もちろん、やがて終生に渡り孫文の事業を最も熱心に支援し続けた日本人のひとりとして知られることになる宮崎滔天である。その滔天はみずから日記に記しているように、すでに前年の1899年、香港へ向う途次に寄航した上海で、文そして白岩と午餐を共にするような関係を築いていたのである。以下、日記の関連部分を摘録してみる。

『浮萍日程（二）』¹²

七月十七日、朝上海に着す。午後二時上陸、米租界東亜同文会に井出三郎氏を訪ふ。……

十八日、朝九時、再び同文会に到る。乃ち井出氏と相携へて文廷式を訪ふ。談二時間余、辞して同文会に帰り昼飯を喫して帰船す。……

十九日、正午、文廷式来り訪ふ。席を甲板に設けて談少時、又白岩龍平氏来る。三人卓を囲んで午飯を共にし談笑数時にして別る。……

これらの記述より、1900年春の東京における文、宮崎、白岩の交流には、事前にそれを誘うような出会いがあったことが判るとともに、彼等を引き合わせるうえで、やがて文廷式の来日を援助することになる東亜同文会が重要な役割を果たしていたことも判るのである。

残るは、彼等3名に孫文がどのように繋がり得るのかという点の解明である。

そもそも1899年夏の滔天の香港行は、孫文の広東工作の一端に関わっての旅であった¹³が、その年の春から初夏にかけての彼自身の中国情勢に対するスタンスは、犬養毅の意を受けて孫文と康有为派の提携を周旋するものであった¹⁴。また、1899年5月31日に上海に到着した白岩も「文廷式等变法派人士と熱心に交際していた」一方で孫文の活動にも注目していた¹⁵。つまり、当時の滔天、白岩の中国情勢観、中国政局観に基づくならば、彼等が、文廷式と孫文を引き合わせることに意を注ぐのはむしろ当然の行為であったと考えられるのである。

IV

それでは、文廷式本人は、孫文との会見をどのように考えていたのであろうか。

先に引いた、孫文との会見日当日を滔天と酒席を共にしたと述べるに止めた3月5日の日記の記載は、それを表沙汰にしたくなかった文の意思をよく表わしているといえるだろう。その日、文は孫文に会う前に板垣退助等の訪問を受けているのだが、それについても「是非とも私に政事を語るよう求めてきたが、私はそれには応じず、おおむね彼等の党の主張を問うに終始した（必欲余談政事、余無所言、略問其党中意旨而已）」と述べている通り、確かに彼自身は、日本滞在中、政治を語ることに極めて慎重であった。

また、ふたりを引き合わせた滔天そして白岩もその会見の意味・意義や具体的な会談内容について記録を残しておらず、このサイドから会見の実際を窺い知ることは難しい状況にある。では、孫文サイドの記録に視点を移してみるとどうであろうか。すると、複数の孫文の年譜・年表類において、興味深い資料の存在にゆき当たることが可能になるのである。それらはいずれも3月5日に文廷式が孫文に語った内容にかなりリアルな形で言及している。

○羅剛『中華民国国父実録』（羅剛先生三民主義奨学金基金会、1988年、台北）

国父三十五歳 民前十二年、光緒二十六年 庚子 公元一九〇〇年

春 文廷式来談拳乱事。与宮崎寅藏籌集日本同志南下大挙。

三月間、文廷式渡日、住東京芝区南佐久間町信濃屋本店謁見国父談論国事、謂山東義和団日漸猖獗、將於四、五月間挙兵、此為革命之良機。国父大喜、決籌挙義師。時内田良平亦在座、亦深喜有此良機。国父乃命内田往訪正在旅行之大隈重信及犬養毅、請予援助。内田並返福岡向親戚兒島哲太郎、籌款三千元、以為聯絡同志之需。宮崎寅藏復与内田等謀、邀集日本同志末永節、福本誠、清藤幸七郎、平山周、原禎、島田経一、尾崎行昌（尾崎行雄之弟）等共至東京会商進行事宜。其中有分別自海參崴、漢口、香港等地歸來者。時日本志士願為国父効命者達三百余人。

○段雲章『孫文与日本史事編年（増訂版）』（広東人民出版社、2011年、広州）

1900年3月 戊戌政変後東渡日本、後曾来往東京、上海的文廷式、住東京芝区南佐久間町信濃屋本店、謁見孫文、説、山東方面的義和団日漸猖獗、定四五月挙兵、此吾革命党之好機會。孫文大喜、加緊作起義準備。時内田良平在座。孫文即令内田往大阪訪正在旅行の大隈重信及犬養毅、請予援助、並託内田組織日本志士、待機出發。内田返福岡、向親戚兒島哲太郎説明詳情、得金三千元、又赴各地聯絡同志、得三百余人願意効力、均分散各地候命出發。

折からの義和拳の攻勢こそ革命の好機なり、と孫文に文廷式が説いたとされるこの記述には、両書も注記しているように基づく同一の資料が存在する。それは、孫文に関わりを持った日本人を列

挙する形で彼と日本との関係を描いた台湾人研究者、陳固亭氏の『国父与日本人』（幼獅文化事業公司、1965年、台北）で、以下の部分がそれに該当する。

二十二、国父与内田良平

一九〇〇年三月、是北京将發生拳匪之乱的前两个月、革命党人文庭式^{マツ}赴日、住東京芝区南佐久間町信濃屋本店、他謁見国父時内田亦在座、他說、「山東方面的義和団日漸猖獗、定四、五月挙兵、此吾革命党之好機會。」孫文大喜、加緊作起義準備、令内田往大阪訪晤正在旅行の大隈伯及犬養毅両氏、請求援助、並記組織日本志士、待機出發。内田返福岡向親戚兒島哲太郎、説明詳情、得金三千円、赴各地聯絡同志、見義勇为国父効命者達三百余人、均分散各地候命出發。

実は、この記述にも、陳氏が自注に示しているようにさらに基づく資料が存在する、それは内田良平の自筆年譜と考えられている『硬石五拾年譜』¹⁶で、部分的には滔天の『三十三年之夢』とも相互補完関係に立つような中国革命と日本の関係を解き明かすうえでの貴重な資料である。以下、陳氏が利用した『硬石五拾年譜』の該当部分を引いてみよう。

拳匪の乱と革命の好機會

三月初旬に至り、支那より文庭式^{マツ}渡来芝区南佐久間町信濃屋本店に投宿せり。孫文が訪問したる際同人の語る所によれば「山東方面の拳匪事を企て居る形跡あり。四五月頃に至らば挙兵すべし。是れ吾党の乗すべき好機會なり」と。孫文大に喜び挙兵準備に焦慮せり。

此に於いて余は、宮崎寅藏、末松節、清藤幸七郎の三名と同行し、途中大阪に立寄り、大隈伯と遊説に来れる犬養毅を中の島花屋に訪ふ。不在にして夜は歓迎会に出席せらるゝ予定なれば帰宿は遅くなるべし、と。不得止北陽に遊び翌朝再訪すれば既に京都に出發せし後なり。即ち九州に向かふべく停車場に至り汽車に乗れば、犬養夫婦子供等迄其の汽車中に在り。犬養は早朝出發京都に残せる妻子を迎へ、岡山に帰省するとのことなり。宮崎九州下りの用件を語り終つて車中快談を続け、岡山にて犬養と別れたり。熊本に到れば小山雄太郎頗る歓待を為し、余が刀劍癖あるを知り数刀の所蔵を贈与せり。余大に喜び福岡に帰り資金調達に苦心したるも、容易に大金を得るの道なし。因て親戚兒島哲太郎に目的を打ち明け幾分の援助を求めたるに、快く三千円を与へたり。之にて同志運動の費用は事足るべしと較々意を強ふするを得。末永が交渉せる中野徳次郎は「近々上京の予定なるを以て東京にて決定すべし」とのことなれば、一同帰京することに決し出發せり。

拳匪の乱と革命党援助（三十三年）

……前略……

孫は此の形勢を見て機逸すべからずとなし、清朝が信を列国に失せるに乘じ、革命勢力を樹立して天下に号令せば、目的を達すること容易なるのみならず、列国も亦た直に革命政府を認めるに至らん、此の際寸時も猶予すべからず、非常手段を執り事を挙げざる可からずとて同志の尽力を求むる所あり。一同も之に賛して、余に日本人の一隊を組織し、孫の中堅軍となりて援助するの任を委嘱せり。……中略……約三百余人の同志を得たれば、之を諸所に散在せしめて時機を待ちたり。

この一文を陳書の記述を比較すると、文廷式の名前の誤記（文庭式）が『硬石五拾年譜』から継承されたものであることを始めとして内容が一致していることが判る¹⁷。

戦前における代表的右翼政治運動家、アジア主義者（東亜同文会の設立メンバーのひとりでもある）として知られる内田良平は、対露問題に専念するようになるまでは熱心な孫文支援者であった（内田に孫文を紹介したのが滔天であった）。中国革命同盟会の結成準備会が東京、赤坂の内田の自宅で開催された（1905年7月30日）のはのちの有名な逸話であるが、当時、内田が孫文の厚い信頼を受ける存在であったことは『硬石五拾年譜』の他の記述からも読み取ることができる。

加えて、文、孫の会見に対する内田の関与についてそれを匂わせる資料もある。白岩龍平の日記によれば、2月23日、すなわち滔天が孫文とともに白岩を訪ねてきた前日に白岩が内田を訪れているし、また、実際に文、孫の会見が実現した3月5日の前日にも白岩は内田を訪れたうえでその後文と午餐を共にしているのである。このことを上述のような内田と孫文の関係に考え合わせると、文、孫の会見の内容についての内田の記憶——『硬石五拾年譜』の文面からは内田がその場に居合せたという確証は得られないが——は十分な資料的価値を有するといえるだろう。

V

そのうえで、内田の記憶内容にはひとつの疑問が生じることになる。文廷式は孫文に挙兵の好機到来と告げた際に「吾党」という表現を用いて語りかけたことになっている。この「吾党」とは、いかなる党派、勢力を指しているのだろうか。段雲章氏の解釈では、明らかに文みずからが「革命党」と称したことになっている。しかし、一般に文廷式は「帝党」、「変法派」に分類されてきたものではなかったか。

この疑問に対する答えは文廷式の政治的対場の変遷を固定観念に捉われぬ形で論証することを目指した汪叔子氏の研究¹⁸によって得られることだろう。汪氏は、文の日本行を論じた論文の一節において、彼が出仕以降「帝党」をもって任じていたその政治的立場、主張を徐々に変化させてゆきやがて康有為等とも距離を置く一方で革命論的傾向を強めていった過程を論証している。結論として汪氏は、文廷式が「甲午（日清戦争、1894年）より戊戌（変法維新運動、1898年）に至りさらに庚子（義和団事件、1900年）へと時代が移りゆくなかで、ついにその愛国主義を発展させて資産階

級革命の道を歩むようになり「孫党」となった」と断じている。この結論に従うのであれば、1900年3月5日、まさに文廷式は「孫党」を「吾党」と呼ぶ状況にあったということになる。汪氏は該論文を文と革命派人士の交流を示す直接的な資料の発掘、紹介を待ち臨むという一文を呈して締めくくっているが、内田良平の記録はそれに十分にかなう貴重な資料ということになるだろう。

注

1. 強学会と文廷式の関係については、湯志鈞『戊戌時期的学会和報刊』（台湾商務印書館、1993年、台北）第2章、北京強学会和《万国公報》、《中外紀聞》参照。
2. それらは以下のようなものである。

2014年度岡山大学大学機能強化戦略経費（大型研究推進支援）「岡山の塩業家野崎家が形成した近代東アジアネットワーク——塩・人・書画——」。

2015年度岡山大学大学機能強化戦略経費（大型研究推進支援）「もう一つの「学都」岡山の物語——閑谷学校を中心とする近代東アジアネットワークの研究——」。

2015年度両備糧園記念財団研究助成（文化・芸術・教育研究助成）「閑谷学校と近代東アジア」。
3. 『東遊日記』は、趙鉄寒編『文芸閣（廷式）先生全集』（近代中国史料叢刊続編第14輯、文海出版社、1975年、台北）が収録したことによって初めて利用が可能になった。また、汪叔子編『文廷式集』（中国近代人物文集叢書、中華書局、1993年、北京）も趙編版を底本に収録する。
4. 白岩龍平の生涯とその業績、評価に関しては、中村義『白岩龍平日記——アジア主義実業家の生涯』（研文出版、1999年、東京）が詳細を極める。
5. 孔祥吉「文廷式の日本之行」（『百年潮』2004年第3期）が、その代表的研究である。
6. 汪叔子「文廷式庚子日本之行」（『中日文化与交流』第1輯、1984年）が、その代表的研究である。
7. 注4参照。
8. 錢仲聯「文廷式年譜」（『中華文史論叢』1982年第4期）。
9. 近衛篤麿日記刊行会編『近衛篤麿日記』第3巻（鹿島出版研究会、1978年、東京）。
10. 翟新「東亜同文会と清末中国の改革運動（1898—1899）」（『法学政治学論究』第31号、1996年）。
11. 神田喜一郎「内藤湖南先生と文廷式」（『図書』第360号、1979年）。

杉村邦彦「内藤湖南と文廷式」（『桃山歴史・地理』第24号、1989年）。

劉方「文廷式と日本」（『月刊しにか』第2巻第4号、1991年）。

鄒双双「文廷式与日本文人的交遊——以野口寧齋的交往為中心」（『萍鄉高等専科学学校学报』

2011年第4期)。

12. 『宮崎滔天全集』(平凡社、1976年、東京)第5巻所収。
13. 宮崎滔天『三十三年之夢』「南洋の風雲と吾党の活動」(同上『全集』第1巻[1971年]所収)には、その端緒を「既にして一飛電あり、孫君の処に至る。云う、広東内地末派の人士漸く動作を始めんとすと。孫君余をしてその実情を視察せしむ」とある。
14. 近藤秀樹編『宮崎滔天年譜稿』(注12に所収)。
15. 久保田文次『孫文・辛亥革命と日本人』(汲古書院2011年、東京)第4部、孫文の日本人同志、第1章、萱野長知の基礎的研究)。
16. 『硬石五拾年譜』の成立に関しては、『硬石五拾年譜 内田良平自伝』(葦書房、1978年、福岡)の西尾陽太郎氏の解説を参照。なお、本稿では、『硬石五拾年譜』本文に関しては雑誌『祖国』1954年5月号(第6巻第4号)「宮崎兄弟特輯号」に掲載されたものを利用した。
17. ところで、現在刊行されている『硬石五拾年譜』のなかには、1900年3月初旬に孫文が訪問したのは文廷式ではなく唐才常であるとするものがある(注16の『硬石五拾年譜 内田良平自伝』および『日本人の自伝』11[平凡社、1982年、東京]所収の内田良平「硬石五拾年譜」上)。何故そのような異同が生じたのかについてはよく判らない。あるいは『硬石五拾年譜』の別の箇所では内田が唐才常の起義の失敗と彼の処刑について触れた際、1900年「三月初旬に東京に來たりて拳匪動亂の形勢あるを知り、此の機に乗じて起つべしと唱へ居たる唐才常は漢口に於て拳兵の計画洩泄し捕へられて斬に処せらる」(「孫文の上海行と余の密謀」の項)という記述があるため、編者がそれとの整合性を図った結果なのかもしれない。しかし、日本において康有為と孫文の提携を模索していた唐才常(孫文と会見している)は前年10月には中国に帰っており、1900年3月初旬に東京にいた事実はない(陳善偉『唐才常年譜長篇』[香港中文大學中國文化研究所專刊 11、中文大学出版社、1990年、香港])ので、これは内田の記憶違いであったと思われる(また、文廷式が、唐才常によって1900年に春に上海に設立された政治団体、自立会の主要メンバーであったことも混乱に拍車をかける結果となったのかもしれない)。なお、『東亜先覚志士記伝』上(黒龍会出版部、1933年、いま原書房の復刻版(1966年、東京)がある)46、惠州事件の前後の項および『国土内田良平伝』(明治百年史叢書第11巻、黒龍俱樂部編、原書房、1977年、東京)第6章、支那革命揺籃時代、(1)革命拳兵の謀議の項の記述では1900年3月初旬に孫文と会ったのは文廷式であるとされている。
18. 注6参照。

【付録】

本欄には、「研究ノート」において作成した資料、すなわち『東遊日記』の主要部分である東京滞在記(1900年2月17日から4月5日まで[光緒二十六年正月十八日から三月六日まで])を適宜整

理したうえで、その内容の理解に資すると思われる『白岩龍平日記』と『近衛篤磨日記』の記載をそれぞれ日記日付順に摘録したものを再録した。なお、明らかな間違いと思われる記述に対しては〔 〕のなかに修正案を示したこと、および、『東遊日記』の日付に関しては、原文通り旧暦で表記したうえで（ ）内に新暦に換算した日付を書き加えたことを申し添えて置く。また、使用した各日記資料の書誌学データについては、それぞれ注3、注4、注9参照のこと。

◎『東遊日記』

光緒二十六年（1900年）

正月十八日（2月17日） 晴。晨至日本都城、即江戸旧地、今為東京。永井、白巖、国友、田岡、本田、田辺、田鍋諸君已在車辺相迓、握手道故、欣然語笑。木齋遣車来、因先至旅館、乃往相見、三年之別、滄海生桑、絮談久之、宏瑣兼及。田辺、白岩邀至酒館、選舞徵歌、漏深始散。木齋仍同至旅中、稍談而別。

正月十九日（2月18日） 大雨。早起偕白巖訪同文会諸君。午飯於使館。飯後至華族会館、近衛公爵、長岡子爵在此相待、叙談少時。……永井禾原君招飲香雪軒樓、同集者森槐（大来）南〔槐南（大来）〕、本田幸之助、田辺為三郎、永坂周二暨永井君之弟三橋、又白岩、巖永共九人、作詩數章、情韻交美。

正月二十日（2月19日） 晴。清浦圭吾約談片刻、外部次官高平略談。往觀上議院、規模亦頗宏敞、演說選舉事甚久、惜吾不解東語、未知其意所在也。飯後往拜南条文雄、未遇。亦往候中西正樹君、不遇而歸。内藤虎之助來談甚久。……。

正月二十一日（2月20日） 陰。發中国信。永井禾原来談。偕白岩子雲遊上野動物院。……。旋遊帝国図書館。閱書者百余人、檢其篇目、余所欲睹〔睹〕之書亦近百種。因購其目錄而歸。椒微招飯紅葉館、夜深始散。

正月二十二日（2月21日） 早訪野岐君見。因訪本田種竹。圖書四壁、皆華文、宋、元、明、清四朝集部略近百種、又、所遊之地、皆携斷瓦文石而歸。其好事可熹也。南条文雄君見。顧忽忽略叙數語、約改日暢談。佐佐友房來寓……。

正月二十三日（2月22日） 晴。早訪椒微。午赴野岐約。席散往下議院觀議。歸遊書肆、購哲学書數種。……。

正月二十四日（2月23日） 晴。拜松平正直見。偕椒微往觀博物院……。晚飯星岡茶寮、夜深乃散。歐陽立齋由神戸到東京。

正月二十五日（2月24日） 晴。偕椒微、笠齋赴大森觀梅花……日本内務大臣西郷從道約見、未赴。晚歸得家書……。

正月二十六日（2月25日） 晴。往拜福島。午間近藤氏招飲宅中、同集者清浦、近衛、野岐、矢野、田辺、白岩諸君。余与椒微、孔懷三漢人耳。樂奏能狂言、劇名舟辨慶、媼之酒……。正月

二十七日（2月26日） 晴。偕立齋游横浜、商市殷闐不及上海之半。飯馮孔懷家、旋偕遊植物公会。四時半鐘、由汽車回東京。福沢捨次郎招飲、聞得北京電、山東土人有与德意志鐵路工兵開釁之事。晚至椒微处、譚至深夜。

正月二十八日（2月27日） 晴。詣椒微、立齋处、暢談竟日。……是日發上海信。

正月二十九日（2月28日） 晴。大風。近衛招覽華族学校、今改為学習院……旋詣益孝田〔田孝〕家、略譚歸。本田、小林来、均未見。

二月初一日（3月1日） 內藤来。同往晤大内青巒、洞下居士也。贈余洞宗聯珠集。……又偕中西君同詣大隈重信、日本前執政也。久談後、觀其園中養花、凡数千種、有印度、非洲各品、色皆奇艷。……。

二月二日（3月2日） 微雨、午後陰。応伊藤博文侯之約、往談一時許。政事才也、然神識未有過人处。晚赴近衛霞山之招、設席伊家。出所藏源順倭漢抄稿本兩卷、書法甚精、千余年来字画完好。真宝物也。又出其先人家熙唐六典校本底稿数十冊、博引群書、字字校勘、凡二十年、乃成此書。……。

二月三日（3月3日） 晴。偕椒微、子雲往紅葉館、為三島毅賀生日、見宗重望、桜井熊太郎諸人。晚集於密多里亞酒館。是日內藤来、見贈日本美術史、南条梵本阿弥陀經講義諸書……。

二月四日（3月4日） 晴。早餐野崎家、忽地震、窗櫺格格有声、日本習以為常……。福島安正来、大坂石埭約晚餐。石埭作詩、知医、未至中国、而甚慕華風、飲食居室皆用華製、頗得其似、亦可異也。森泰二郎、本田幸之助、速水一孔同集。

二月五日（3月5日） 晴。板垣退助日本從二位伯爵、片岡健吉等約談、皆自由党人也、必欲余談政事、余無所言、略問其党中意旨而已。訪森大来、重野成齋、並不遇。晚宮崎招飲。

二月六日（3月6日） 晴。訪岡千仞、十七年前広東旧友也。頽然老矣、而劬書猶甚。……午後南条文雄来。……益田孝君招晚飯、偕椒微往、近衛、清浦諸人同集。夜歸、椒微来寓久談。是日子雲以病入醫院調理。

二月七日（3月7日） 晴。往觀印刷局、……龜谷行来。

二月八日（3月8日） 陰、微雨。接希元、実甫信、言近日上海頗洶洶也。往觀裁判所。余問清浦司法……岡千仞約同遊小西湖、重野安繹在焉、尚有老者数人、亦有麗人三人、略談数刻。是日在椒微处遍閱上海各報。余問重野、欲得日本蘭陵王破陣樂譜、前者近衛公固言可得也。重野未言及樂譜事、以筆答云、此間有雅樂部、明治以後属式部職官中官署、在肆不失随〔隋〕唐樂之旧、外有高麗樂、大抵与唐書樂志同。麗樂、今朝鮮亦不伝。

二月九日（3月9日） 晴。福島安正約觀陸軍学校中之幼年、中央、士官三学校。歸、西郷重〔從〕道又約相見、偕馮孔懷往談片時。晚与椒微談至夜深……。

二月十日（3月10日） 晴。內藤虎次郎約至上野公園三宜亭、島地默雷寓東京市麹町区中六番町六番地、村上專精本郷区弥生町三番地、高楠順次郎芝城山町四、藤井宜正、梅原融、島田蕃根、高喬

〔橋〕本吉、田代直樹、松岡又五郎、上田三徳諸人同集。島田氏広求中土所佚釈典唐、宋、遼、金皆有、寄歸楊仁山重刊。藤井撰仏教史。村上、島地皆頗有伝書。高楠年甚壯、而能通十数国語言文字、真奇士也。諸人約晚餐西洋酒楼。宮崎来稍談。

二月十一日（3月11日） 陰晴不定。島田蕃根来。申刻、漢学家四十余人邀余集於八百松間、仿柏梁体賦詩。余起句云、海山葱籠雲氣開。森槐以〔衍字〕南携詩来、重疊穎、晒韻七古。余即席和之。……是日同集者、重野安繹、岡千仞、森泰二郎、長尾慎太郎、末松青萍子爵、荒浪市平、藤田達芳、日下東作、成瀬温、内藤虎次郎、巖谷修、飯尾麒太郎、松前讓、龜谷行操岸、上柴原和、薄井龍之、大畑弘国、田代真樹、入江為守子爵、速水一孔、手島知徳、本田幸之助、浜村蔵六諸人、大抵皆名士有失去名帑者、不能悉記。

二月十二日（3月12日） 晴。後藤邀往作書。座中有田水女士、云学漢文二十年、学易十余年、頗通筮法、曾在日本天皇宮中教皇女讀書。詣医院觀子雲病、雖無痛楚、神氣尚弱。往椒微処談。……。

二月十三日（3月13日） 晴。来客甚多、酬対頗苦。午間偕中西正樹遊愛宕〔宕〕山……。速水一孔来。椒微来夜談。

二月十四日（3月14日） 陰、午後大雨。入夜不止。偕中西正樹君、同訪犬養毅……。

二月十五日（3月15日） 晴。得実甫弟信。松前讓来、将帰北海道也。与椒微、孔懷晚間集於湖月楼。有芸妓属意於優伶者、席間屢出其照像与之接吻、又執筆作書寄之。問之、則此妓亦曾在学堂肄業者也。中川義弥言、近来国中風氣、男子購妓者像、則往往祕藏、不敢示人。閨閣中購優伶像、則屢呈諸父母之前、亦不見責、深嘆習俗之弊云。

二月十六日（3月16日） 晴。得王子展書。長尾慎太郎、手島〔島〕知徳、島田翰林（来）、島田約往觀其所藏。午後往看白岩子雲、病已霍然矣。詣内藤寓、見古箏譜、鬻簫未暇借鈔。詣島田家、見紹興九年九月十五日紹興府雕造之毛詩單疏本……。

二月十七日（3月17日） 陰。偕内藤往那珂通世家、白鳥庫吉、桑原隲藏在座、觀景教碑影本。……那珂著支那通史、近專考元史地理、将刻成書。白鳴〔鳥〕贈余以所撰唐闕特勒碑考一卷、惜以德文行之、余不能読。又言今土耳其文与古突厥文大異、惟英人某者潜心考索、竟能読古突厥文、亦可熹也。手島知徳招飲、偕椒微同往、夜分始歸。

二月十八日（3月18日） 陰雨。偕椒微重至島田家。島田有小疾。其所藏古書、未及詳閱、欲見其明抄本宋会要及文館詞林、則請俟異日也。……。次韻内藤虎次郎見贈之作（略）。

二月十九日（3月19日） 陰晴不定。申刻雪霰。同文会諸友招宴於偕樂園、用中国肴饌、近衛、長岡、榎本及犬養、中西、田鍋等凡十七、八人。是日、偕中川至浅草朝倉書肆、閱購書籍。……。

二月二十日（3月20日） 晴。往上野琳瑯閣購書……以価昂未収也。往視子雲、疾已全瘳矣。

二月二十一日（3月21日） 陰雨。島田来、見影抄北宋本論衡、新序等書。馮孔懷招宴伊家、手島同坐。内藤炳卿来、未見。

- 二月二十二日（3月22日） 雨。宮崎寅藏、黎覺人同年各招飲。
- 二月二十三日（3月23日） 晴暖。始有春意。清浦圭吾、松平正直、佐佐友房同招飲於紅葉館。
- 二月二十四日（3月24日） 陰雨。
- 二月二十五日（3月25日） 招椒微、子雲、覺人、秋水諸人同集於馮孔懷家、子雲不至。
- 二月二十六日（3月26日） 晴、大風。釗堂招飲。夜地震。平尾光字、田水女史來。言為余筮得晉（易、晉）之互體蹇卦、因覆車傷手、故久未來。囑余稍留以避連蹇之患。余曰、獨不見爻辭云、利西南乎。此東方、余未宜久處也。
- 二月二十七日（3月27日） 晴。訪子雲。晚偕椒微至湖月樓小飲。小室重弘來、兼贈余七律三首。李竣鎔來、未見。
- 二月二十八日（3月28日） 晴。午後陰雨。李竣鎔復來、朝鮮國主之侄、大院君李昰應之孫也、頗以國弱勢危為懼。余告以力政治兵、孟子曰、未聞以千里畏人者也。竣鎔深慰而去。訪屈山、其妻接談良久。仍詣椒微夜談。是日發上海信。……。
- 二月二十九日（3月29日） 陰。閱上海報、無甚要事、知謠言將息矣。
- 二月三十日（3月30日） 晴。佐佐友房招飲狐鰻亭、為食鰻之地、而以狐為名、不可解也。岡本監輔所著鉄鞭書、凡四卷、已刻者僅一卷耳……。緒方二三來、明日當赴西京去。又中川克一即席贈詩一章五古、余依韻答之。
- 三月初一日（3月31日） 晴暖。天氣昭朗、因遊植物院……。往品川訪花未開。小酌於西洋料理……。晚偕椒微、中川同飲於綠屋。
- 三月二日（4月1日） 陰雨、入夜大雨。偕二三人遊三皇山啜茗。……。
- 三月三日（4月2日） 晴。椒微脩曲水故事、偕日本文士三十余人、宴於向島之植半樓、到者二十四人、盡歡而散。
- 三月四日（4月3日） 晴暖。偕宮崎訪頭山、不遇。詣淑（椒）微微（衍字）、夜談。
- 三月五日（4月4日） 晴。內藤虎次郎來談。言日本變政所以能稍有成效者、以外勢不迫之故、且其弊亦甚多、外人或謂事事皆美者誤也。椒微招飲綠屋。……。
- 三月六日（4月5日） 晴。早起遊上野、觀櫻花、開者十之五、六。……。走別椒微、子雲。申刻發新橋、來送者二十許人、友誼可感。夜將曉到岡崎。

◎『白岩龍平日記』

明治三十三年（1900年）

2月17日 迎文廷式於新橋載俱歸。午下同訪清國公使館伴木齋夕赴増田屋小筵與碧堂只四人。此夜天飛雪。

2月18日 同文氏訪問各處夕禾原設席香雪軒雅集槐南種竹等計者七八名。

2月19日 同文氏訪清浦觀議院。夕手嶋張筵河內屋、祝其四十二誕辰也、近衛公以下到者八九名、

余亦与焉。

2月20日 午前在寓、下午同文氏觀動物園、図書館。夕李木齋在紅葉館饗宴、到者芸閣、禾原、碧堂与余及翻譯馮五人。

2月21日 訪野崎、午下佐々来見芸閣、此日蘇杭案衆議院通過。

2月22日 上午下午馳車訪各代議士陳謝。正午野崎設席帝国ホテル請文及李公使午餐、中西、永井、手嶋、田辺与余皆參焉。晚東亜同文会招飯于華族会館、近衛、清浦 清家三名皆来……。

2月23日 同文氏訪松平正直、近藤、到公使館。午後見近藤、訪内田、彭城諸人、皆不在留片。見山県伊三郎到貴族院。夕李、文在星岡茶寮晚飯来招。飯後遇野崎、田辺、夜半僅飯寓。貴衆兩院以此日了議事以明日挙閉院式。

2月24日 訪松永、神鞭、林有造。夕永井向上海送到新橋。宮崎与中山樵来訪不值。……作書報閑谷。

2月25日 誘文氏訪福島、正午到近藤之家応其招也。文、李為正賓、近衛公、清浦、矢野文雄、野崎、田辺、小原鋼吉与余併十人、演能樂有男女舞曲、食膳豐盛、極其美備、五時始散。能曲演舟弁慶深獲我心。……中川從昨日起為文芸閣視通訳之事。……。

2月26日 訪野崎、近衛公、与高橋謙、松倉会。同野崎訪清国公使館。……此夜野崎招派清留学生、稻葉、大原、神津晚飯、余与景山、狄水、狄殷同席。……。

2月27日 前六時廿分輕装上車到神戸迎内子也。……。

2月28日 前九時迎艷子於神戸丸聆悉舟行極穩無些疲憊把手上陸、先詣楠公社、午下塔〔搭〕汽車向閑谷、由和氣請腕車五時到山、薇翁傷風在褥、一家迎相慶、夜泊白雲、松籟泉声入夢清絕。

3月初1日 【略】

3月初2日 前十一時卅分到新橋、景山、中川迎在駅。夜到近衛邸、文廷式、野崎、手嶋、田辺与余凡五人賜餐式、皆依西京宮廷之樣饗応甚厚。

3月3日 朝訪野崎、正午在富士見軒与景山、中村、千葉平次郎、田辺会食。散後訪近藤到会社。三時到紅葉館臨三嶋中洲七十寿筵也。会者百九十余名、散後約李、文到緑屋小叙。……。

3月4日 訪内田、正午在野崎飯、会者文、三嶋中洲、中村雄助諸人。……。

3月5日 天气与心晴朗、訪澁沢不会。携艷子到五番町、野崎氏与碧堂一同午飯。訪手嶋。午下訪大倉、到大東会社、此日係株式会社創業總會。散後在木挽町小宴、散後再到住吉使文与中山晤。

3月6日 【この日以降、白岩入院、手術（23日退院）。11日まで略】

3月12日 文与中川来看、藤田来訪。

3月13日 野崎、手嶋来看。東京商業會議所員来面。

3月14日 岩永省一来看。

3月15日 正午野崎帰県、使艷子代送新橋。大谷、手嶋来看。患部逐日痊愈〔癒〕。

3月16日 文与中川来暢談。

3月17日 福原林平、藤島素吉生来。

3月18日 日、井上俊三、森永卯八郎、平林生、手嶋来看。此晨天寒雨交雪。

3月19日 大原信。五百木来看。

3月20日 快晴、文、中川、大谷、村山、岸田来看。上海寄来寒山寺碑模本頒送近衛公、野口、近藤、西及坪谷善四郎博文館。

3月21日 【略】

3月22日 神津来看、裁書数通帶到上海及南京处。五百木看病。

3月23日 晴天。午後佐藤国手診察允余退院、電話信濃屋、命車与艶子聯車飯寓。夜与中川鼎座吃洋餐、飛書或電話各知人退院之事。文与李由外飯握手言歡。……。

3月24日 【略】

3月25日 夜柳光亭有亜細亜協會与同文会合併祝筵、参会会者約六十名、有演説、有余興、頗称盛会。八時半歸寓。

3月26日 正午請文、中川、李昼餐談笑。到晡初散。松原榮、大谷、森永諸人来晤。

3月27日 手嶋氏携妻兒来訪。李、文氏来談。一同午飯日晡初散。夜安藤来。

3月28日 【略】

3月29日 (午) 前訪澁沢、午後訪木内。

3月30日 午後迎田辺母子於新橋、佐々招飯干(狐?) 饅。

3月31日 朝訪安田善次郎、訪佐藤三吉、田辺来談。午後彭城、堀見来談入夜辞去。夕艶子訪田辺老母於三橋。

4月1日 夜来発汗在寓静養一日。

4月2日 午後到第二院請佐藤博士診、云病全好欣快無措。到向嶋植半樓、李与文招請也。近衛公、榎本子等会者三十余名。

4月3日 【略】

4月4日 田辺、手嶋両老婆来飯。飯後艶子同遊泉岳寺。

4月5日 文廷式動身、中川送到神戸。夕碧堂来議会社事務、夜中西、田辺来飯。

◎『近衛篤磨日記』

明治三十三年(1900年)

2月18日 日曜日 晴

一 来状 貴族院別紙 小田切万寿之助別紙

一 白岩龍平、文廷式を同伴して華族会館に来る。余、長岡子と共に面会す。暫時にして去る。

〔小田切書状抜粹〕本書持参人は前任翰林院付〔侍〕読学士文廷式氏にて有之、今回本邦漫遊の途に上り候に付き、貴地着の上拝謁願出候得ば、御延見の上相当の待遇を与へられ候様切望仕

候。同人は博覧強記を以て四百余州中に有名なる人物に有之、一昨年の政変後一時奇禍に触れんとせしを、晩生等に於て法を設け救助致置候。然るに今日と相成候ては疑雲も全く解散し、青天白日の身と相成、大に欣居候儀に御座候。同人今回遊歴の資は悉皆友人より支出し、晩生に於ても多少の補助を成し置候。其辺の事情は御含置被下度候。

二月九日

小田切万寿之助拝

近衛侯爵閣下

2月25日 日曜日 晴

一 午前十一時、招待により近藤廉平宅に赴く。文廷式の来朝に付、其知己の人々を招きしなり。文の外、清国公使、馮訳官、清浦圭吾、矢野文雄、野崎武吉郎、田辺為三郎、小原駘吉、白岩龍平、其他郵船会社重役両三名なり。同邸は新築にして家屋庭園共数寄を極めしものにして、高尚の内に雅致あり、甚だよし。飾付も余りに多きに過ぎず、主人の心入れの程感ずるに余りあり。広間にて余興として能一番あり、曲は船弁慶、演者は梅若万三郎なり。夫より午餐を出す。鄭重なる料理なり。新橋、芳町の芸妓席上に周旋す。宴中山本東次郎の伯母ヶ酒一番、鉄之亟、万三郎、竹世、其他一名の仕舞、及び芸妓の舞踊あり、五時皆辞し去る。

2月28日 水曜日 晴

一 午前九時半出門、出院、十時より文廷式、野崎武吉郎、田辺為三郎、手島知徳、中川某文氏訳官等来る。本院參觀の為なり。午前、初等科、高等科、並に図書館等参考品陳列場、理科教場等一覽の後、午餐を餐し、夫より馬術操練、機械体操、柔道、擊劍等一覽の後、小憩して何れも去る。余も引続き帰邸。

3月2日 金曜日 晴

一 清客文廷式、案内によりて来る。同席は野崎武吉郎、田辺為三郎、白岩龍平、手島知徳なり。此日は一切日本風にして、室内の装飾も一として唐物を用ひず、割烹も京都固有の有職料理にして河内屋に命ず、菓子も京都風にして夜梅、残月等を出す虎屋に命ずの他、藏幅を示すに道風、行成等より信尹、家瀬公等のものをもってし、子昂赤壁賦、蘇氏印譜は特に出して示せり。白岩の通訳にて談話諸般の事に涉り、面白き会合なりし。又家瀬公の大唐六典校正の稿本を示せしに、これには頗る感嘆したるものゝ如し。酒食終はりて揮毫を乞ひしに快諾、十数葉忽ちにして成る。其文麈の為に書せしものの如きは、且つ書し且つ微吟し、起句書し終はれば承句既に成る。其速かなる事驚くべし。清国一流の学者たる事は疑ふべからず。……。

3月6日 火曜日 晴

一 午後五時、益田孝の招待により三井倶楽部に赴く。同人、文廷式を招待するが為なり。李公使、馮訳官も来る。同席は清浦圭吾、近藤廉平、中田敬義、小林某、速水一孔、岸田吟香、其他両三名にして、三井高保、同武之助、及び団琢磨、朝吹英二、高橋義雄等、三井組合員等も列席す。鄭重なる晩食あり、新橋芸妓の舞踏等あり。余は少時にして辞して……。

3月19日 月曜日 曇

一 午後四時、李清公使、文廷式、馮訳官等を東亜同文会より偕楽園に招待す。来会者は、長岡護美、榎本武揚、杉村濤、犬養毅、岸田吟香、陸美、池辺吉太郎、平岡浩太郎、中西正樹、田鍋安之助、国友重章、安東□□等なり。酒間詩の唱和あり、食後囲棋あり、清人等は十時前辞して去る。余は更に酒を酌みて、十一時半に至り散ず。此日、文に和漢朗詠集二巻を贈る。

3月20日 火曜日 晴

一 来状 康有為一通は香港より又一通は新嘉坡より

一 康有為の娘同薇の筆になれる画二葉を送り越せり。柏原方に届きたりとして持参す。

〔付記〕本篇は、2015年度に両備檉園記念財団による研究助成（文化・芸術・教育研究助成）を受けて実施された「閑谷学校と近代東アジア」に関する研究の成果の一部である。